巻頭随想

地方の産業振興で豊かな日本に

島根県知事
溝口 善兵衛（みぞぐち ぜんべえ）

内外の景気の低迷、国際競争の激化、少子高齢化、人口の減少などに伴って、我々は多くの困難に直面しています。そうした中で、私は、日本が元気を取り戻し、豊かな暮らしやすい国になるために重要な鍵となるのは、「地方の活性化」であると考えています。

東京のような大都市は便利で刺激的で、さまざまなチャンスがあり若者を惹きつけますが、実際の生活は、決して楽なものではありません。満員電車に長時間揺られての通勤、住居は一般的に狭く家賃は高い、共稼ぎでも生活は大変で、子育ても容易ではない。「過密」が大都市を住みにくいものにするだけでなく、若者が多く集まる大都市で出生率が低くなり、日本全体の人口を減少させているのです。

他方、島根のような地方では、職住近接で住居費も安い、豊かな自然、古き良き文化や伝統、温かい地域社会があって暮らしやすい。そして、地方では農業をしたり、地域活動をされる元気な高齢者も多いのです。しかし、今や、人口流出により、これらの豊かな居住空間が崩れようとする「過疎」が進みつつあります。

大都市部と地方部はいわば、日本を支える二つの車輪です。この二つが、「過密」と「過疎」という相反する不健全な状態に直面しています。私はこの両極端の不健全性を是正し、日本全体がバランスのとれた発展をすることが、真に豊かな日本の実現のためには必須だと考えています。

これまで、地方から大都市に向かっていた人の一方的な流れに対して、大都市から暮しやすい地方への流れを少しずつ拡大する必要があります。そのためには、島根など地方ではまず、産業を興し、地場の雇用を増し、若者の流出を抑えなければなりません。

そのために私が進める、産業振興の大きな柱の一つは「ソフト系IT産業の振興」です。その中核は「Ruby（ルビー）」というプログラミング言語の活用です。「Ruby」は生産性が高く、顧客ニーズに柔軟に対応出来る点が世界的に高く評価されており、急速な普及が見込まれています。その開発者であり、松江市を拠点に活動しておられるまつもとゆきひろ氏を中心に優れた技術を有するエンジニア、企業が県内に存在することから、「Ruby」を活用する施策を積極的に進めています。

「Ruby」は自由に誰でも利用できるオープンソースですから、地方の中小企業であっても、高い技術力さえあれば、システム開発などの元請けとなって、ビジネスに参加することができます。優れた技術を有するエンジニアや企業が、島根にいながらにして世界を相手に事業を展開することが可能になるのです。

こうしたチャンスを活かそうと、県では、①「実践的な人材育成」②「技術力の集積・開発実績の蓄積」③「先進的情報発信とビジネス・販路拡大」の3本の柱を立て、事業を戦略的に展開しています。

「Ruby」を軸とするIT産業振興施策を進めた結果、一定の成果がみられるようになりました。例

えば、「Ruby」のエンジニア育成や実践的なコンサルティング活動を支援することにより、「Ruby」による開発案件を獲得する企業数、契約数が増加しており、事業の拡大につながりつつあります。また、県内のソフト系IT企業が、連携して付加価値の高いシステム開発の発注を首都圏等の県外市場から獲得するなど、新しい県外ビジネスの動きが始まっています。さらに、県外のIT企業が県内に立地する動きが増えつつあった点です。

次に、この「IT産業の振興」に加え、「ものづくり産業（製造業）の振興」がもう一つの大きな柱です。島根でも、景気の低迷などの影響を受け、地場産業はいずれも厳しい状況にありますが、経営・技術・販売力の強化や新技術の研究開発、人材育成等に対する支援を継続的に実施し、県全体の競争力の強化を図っています。

古くから島根県では、全国に誇るたたら製鉄などがあり、金属加工などの「ものづくり産業」は、特に、安来市から松江市、出雲市にかけての地域を中心とした県東部に一定の集積がありました。中には世界に誇るような高い技術力をもった企業もあります。また、県西部でも、道路の整備に伴って、企業の進出がみられるようになってきました。こうした企業に対して、技術高度化の支援や経営革新・生産革新を重点的に支援しています。

また、県が研究開発のリスクを負担し、先導的な新技術や新素材の開発にも取り組んでいます。すでに、ICT技術開発プロジェクトやプラズマ熱処理技術開発プロジェクトのように、事業化の段階に入ったものも多数あります。

こうした取り組みで重要な役割を果たしているのが産学官の連携です。地方においては、ごく少数のリーディングカンパニーが技術的、経営的に、圏域の産業全体を牽引するというスタイルよりも、むしろ、さまざまな特長を有する中小企業が、それぞれの持ち味を活かして事業を展開するというスタイルの方が、現実的です。「産（企業）」側のニーズと「学」側の研究シーズや人材を有機的、効率的に結びつけ、必要な支援を行う「官」との三者の連携がうまく機能することで、地方にあっても、大企業や大都市部の企業と競い合える力が発揮できるようになると考えています。私は、そうして、他地域との競争に打ち勝てるよう、優秀な人材の確保や技術力の向上、企業の集積を目指していきたいと考えています。さらに、こうした取り組みが、経済的な効果だけでなく、地域としての誇りとなり、地域の活性化へと波及することを期待しているところです。

次に、島根の産業振興の三つ目の大きな柱として「観光の振興」があります。以前、テレビのクイズ番組で、島根県は「どこにあるのかが一番わからない県」とされていましたが、県の位置はわからなくても、例えば、出雲大社や世界遺産の石見銀山、津和野や隠岐の島など、よく知られた名所、旧跡が数多くあり、古きよき伝統、文化が脈々と受け継がれています。

また、再来年の2012年（平成24年）には、現存する最古の歴史書である「古事記」が編纂されて1300年という記念すべき年を迎えます。

「古事記」は712年に編纂された上・中・下の全三巻から成る日本で最初の公的な歴史書ですが、そのうち上巻（かみつまき）では、日本の国の成り立ちのころの、いわゆる「神話」が語られています。「スサノヲノミコトのヤマタノオロチ退治」や「オオクニヌシノミコトの国造り、国譲り」など、物語としても面白く、登場する神々も個性豊かで魅力的です。実に、上巻の三分の一は、こうした出雲神話で占められています。

また、島根には、国内唯一、ほぼ完全な形で残っている「出雲国風土記」（733年）があります。さらに「万葉集」（7世紀～8世紀）では、万葉集第一の歌人とされる柿本人麻呂が石見国の自然をたたえた歌などが残されており、県内各地に人麻呂ゆかりの場所や伝承が数多く残されています。古代の世界においては、島根は非常に大きな存在でした。

県では、古事記1300年を、単に、観光客を誘致するためのイベントとしてではなく、県民一人一人が、ふるさとの歴史や文化に思いをめぐらし、郷土への誇りを確かなものにする良い機会になるような取り組みを行いたいと考えています。

最先端の技術と豊かで美しい自然と古き良き伝統文化が融合した島根らしい活性化が、我々の目標です。大都市集中ではなく、全国の各地方で、それぞれの地方の特長を活かした動きが活発になれば、経済全体の成長が鈍化しても、日本全体はもっと豊かで成熟した社会の中で、人々は生活をより楽しむことができるようになると考えています。